

2011年度活動報告

昨年は3月11日に東日本を未曾有の大きな震災と原発事故が襲い、被災地はもちろんのこと思想、文学などの精神世界や表現の世界に今なお深刻な影響を与え続けています。ハンセン病市民学会も沖縄集会開催に当たって厳しい選択を迫られました。震災被害を受けとめた形で開催に踏み出すことができ、その結果、参加者数だけでなく発信したプログラムにも大きな成果がありました。

以下、交流、検証、提言という3つの柱に沿って、昨年度の活動報告をさせていただきます。

1. 交流

昨年の沖縄を舞台とした交流集会は、宮古南静園のある宮古島市から始まり、沖縄愛楽園のある名護市、そして我が国の隔離政策の原点とも言える石垣島・西表島に足を延ばすオプショナル・ツアー八重山を含んで、4日間という市民学会始まって以来の日程になりました。

それにも拘わらず、宮古南静園には事前の予想を3倍も超える約350名の参加者があり、名護市で開かれた全体集会・分科会にも予想の2倍を超える1,000名の参加者を迎え、八重山ツアーにも約90名の参加がありました。

参加者にとって実り多い交流集会となりましたのも、名護集会での地元高校生の方たちを含め数多くのボランティアの方の支えと、4日間の長期に渡りかつ遠距離にある3会場の運営に携わって頂いた現地実行委員会の皆様のご尽力のお陰です。この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

昨年の交流集会は宮古南静園自治会長の宮里光雄さん、全退連の平良仁雄さん、沖縄愛楽園自治会長の金城雅春さんの3人の共同実行委員長、そして「手をつなぎともに生きる社会へ」という集会テーマに代表される通り、療養所を地元開放することと退所者の皆さんに声を上げて頂くこと、そうした沖縄の現状を沖縄の方たちに広く理解して頂くことでした。なかでも宮里さんは重篤な病気を抱えながら職責を全うして頂き、交流集会の成功を見届けられて旅立たれました。「深き川は静かに流れる」という言葉がありますが、宮里さんに相応しい言葉であるように思います。感謝の心を込めてご冥福をお祈り致します。

2. 検証

1) 昨年発足をした戦前、戦後の無らい県運動を検証する「検証作業委員会」は、すでに4回の会議の場を設けて現在も続行中です。出席者から多岐にわたるテーマについて報告を受け、議論を重ねています。今回の交流集会には、まだ成果を報告するまでには至っておりませんが、いずれ中間報告をすることが可能になりましたら、ご報告させていただきます。

3. 提言

1) 「資料館問題プロジェクト」と「啓発プロジェクト」については、もう一度重なり合う部分を整理した上で、それぞれの課題を見極めて進めて行くことにしております。次年度の報告には具体的な提言ができるように進めて参ります。

2) 「啓発プロジェクト」固有の活動につきましては、昨年も交流集会の中で3回目となる啓発分科会をもち、「社会モデル」としての啓発問題を考える端緒と致しました。啓発のあり方を巡る議論はさまざまな角度で存在しておりますので、一方ではそうした課題を網羅しながら、他方でそれぞれに共通している普遍的な課題を発見することも両輪となるべき重要な課題です。今後ともそうした視野で啓発プロジェクトが進められることになるはずで。

4. 部会活動

ハンセン病市民学会には会員の皆様ならば、どなたでも入会自由な4つの部会があります。昨年度は青年・学生部会が9月10日・11日に駿河療養所において「第7回ハンセン病問題を知りたい青年交流会in駿河」を開催致しました。また教育部会は12月26日～28日までの3日間の日程で、奄美和光園で「第7回合宿交流会」を開催致しました。詳しい報告は3月刊行致しましたハンセン病市民学会ニュースに掲載されておりますので省略させていただきます。

2012年5月12日